

東北 VALUE SIGHT 山形



温泉米沢八湯会 遠藤 直人 (えんどう・なおと)

福島大学経済学部を卒業後、株式会社旭テックに勤務。退社後、海外や他の宿を経て、実家である鈴の宿 登府屋旅館に勤める。若手まちづくりグループ「小野川温泉観光知実行委員会」や、ほたるまつりの実行委員長。婚活イベント「おきたまラブゴン」のプロジェクトリーダーや山形大学での非常勤講師など多方面で活躍。
温泉米沢八湯会
公式ブログ <http://ameblo.jp/yonezawa8/>
公式FBページ <http://www.facebook.com/yonezawa8>
お問い合わせ 米沢観光物産協会 TEL 0238-21-6226

ピンチはチャンス—東日本大震災後に予約のキャンセルが殺到した米沢の温泉旅館。しかし、立ち止まっては行かない。旅館経営者らは、「内需拡大」をキーワードにスピーディーに動き出した。その手法は、米沢にある八湯の宿が連携。これまでバラバラだった温泉旅館がタッグを組み、さらに行政、地元と一緒に、震災復興と地元の活性化をめざし走り出した。

「絆」から「結」へ！ 震災で見つめ 直した身近な宝

こうなると内需拡大しかない。

3月11日、東日本大震災。米沢は幸運にも無傷であった。震度5強。揺れで損壊はあったものの、電気、ガス、水道は守られ、宿の命である温泉も無事。米沢は揺れただけだった。

ところが、情報が明らかになるにつれ状況は一変。電話が鳴れば、全てキャンセル。山形新幹線も東北自動車道も復旧のメドが立たず、ガソリン不足が追い打ちをかけた。満室だった3月の連休も一瞬でゼロに。

「いったい、どうになってしまうのか？」

先が見えない不安のなか、最大の関心事は国が発表した「避難者受入」。福島や宮城の2次避難者を1泊3食5,000円で受け入れるという枠組みであった。

「もしかしたら、倒産の危機は回避できるかもしれない」。山形県内の宿泊施設には、藁にもすがる思いがあった。しかし、米沢への2次避難者は多くはなさそうだ、というのが行政の見方であった。

再び先が見えない不安感におそわれるなか、行政との会議の中でポツリとでた一言、「こうなると内需拡大しかない」。

通常、内需は「国内」を意味するが、この場合は「山形県内」のこと。交通機関が絶たれた状況では、

県内や地元といった近隣での需要を喚起するしかないという意味である。まず、宿が地元向けのプランを作ろう。そう決めて会議を終えた。震災から19日、3月30日のことである。

米沢八湯、初めての結束

4月2日、小野川・白布両温泉の旅館組合青年部が話し合い、内需拡大プランについてアイデアを出しあった。「2(ふっ)泊5(こう)食付で、昼は地元飲食店の利用。義援金1,000円を明記」と方針が決まった。さらに「米沢八湯で連携」という新たな発想が出てきた。

「米沢八湯(よねざわはっとう)」とは、姥湯温泉、大平温泉、小野川温泉、五色温泉、白布温泉、新高湯温泉、滑川温泉、湯の沢温泉。米沢市内の8つの温泉を指す言葉である。これまでは、温泉街と一軒宿では経営形態が異なり、交流するきっかけもないまま、各自バラバラに活動してきた。

4月6日、米沢八湯で初の会議。8温泉連携と2泊5食プランを合意。4月15日、設立総会。会の名称は、「温泉米沢八湯会」。4月18日、初の共同プラン「絆の米沢八湯プラン」を発表。目玉は、先着2,500(ふっこうおうえん)名の復興応援特典。館内利用特典2,000円分と米沢の商品券1,000円分。商品券は「復興応援券」と名づけた。温泉街や市内のラーメン店で使える「絆・お食事券」500円分も付けた。

「内需拡大」発言から3週間、震災から約1ヶ月という異例のスピードで会を立ち上げ、プランを発表。迅速な対応は、震災後の4月だからこそできた。あらゆるスケジュールが白紙、宿泊予約もキャンセル

のなかで、一緒に動ける「時間」と全経営者にかつてない「同一の危機感」があった。もし、ゴールデンウィークを過ぎ、再び満室を経験していたら…。面倒な連携より自館を優先し、温泉米沢八湯会は発足していなかったかもしれない。

2泊5食にこだわったワケ

震災後の需要がしぼむなか、あえて「2泊5食」にして予約のハードルを上げたのには、3つの理由がある。

第一に「震災を経験したお客様の心の骨休めとして」。1泊旅行は気軽だが、食事やお風呂で慌ただしく、なかなかゆったりできない。丸一日休める連泊なら、ゆったりできる。改めてご家族やご友人と絆を深める時間にしてほしかったのである。

第二には「地域の経済のため」。旅館に泊まるだけでは、宿でしかお金が動かない。2泊すれば、市内観光や昼食、買物など、米沢全体の経済が活性化する。未曾有の国難を乗り越えるとき、温泉地の旅館だけが生き残っても意味がない。観光施設や飲食店、土産店は運命共同体である。プラン利用が自動的に波及するような仕組みを目指した。

第三の理由は「宿の稼働と価格の安定」。震災後のキャンセルと自粛ムード。旅館は予約がなければ、休まざるをえない。1週間で2日も3日も休みになった。当然、従業員も休み、食材のロスも増える。連泊利用により、宿の稼働を少しでも高める狙いがあった。

さまざまな思いのつまった連泊プラン。米沢八湯の宿が動いていたところ、発表直前に米沢市から強

力なバックアップをいただけることになった。なんと米沢市では、緊急経済対策として補助金の準備を始めていた。通常、補助金は行政が予め枠組みを決め、民間企業を募り、補助を行う。今回は米沢八湯の声を取り入れ、プランに沿った補助になった。これまでの行政の取り組みでは全額を負担するのが当たり前であったが、私たちはより大きな経済効果を生むべく、米沢市からの補助金を「絆の米沢八湯プラン」の復興応援特典に充当した。

旅館だけの狭い視野で考えがちな宿泊プランも、作り次第で他の温泉、行政、商店街、飲食店、被災地とつながり、可能性を広げられると改めて実感した。

実働する窓口

これまでは8つの温泉ごとに窓口があり、一緒に動くことはできていなかった。この度の会の結成は、窓口の統一でもあった。地域の他団体からすれば、宿泊券の依頼やコラボレーションを格段にしやすくなったのである。「8温泉24軒の宿で共通の宿泊券をセールの景品にしたい」。地域の中からうれしい依頼をいただくことが増えた。窓口を見直し、動きやすくするだけで可能性が大きく変わる。既存の組織の行き詰まりを打開できるのである。

1年目、8つの温泉がつながり、被災地、行政、地域の団体との「絆」ができた。

2年目のテーマは、「結(ゆい)」。つながった「絆」をより深め、役割を分担しながら、さらに動ける組織に進化させていきたい。

東北にはたくさんの温泉がある。温泉が地域へ働きかける「絆」の魅力づくりが、地域の独自性の再発見、ひいては復興への原動力になるように心から祈っている。



連携して東北を元気に「温泉米沢八湯会」